

片島分布調査報告書

1985年3月

岡山県笠岡市教育委員会

序

笠岡市は昔から、岡山県西部の陸路・海路の要所として発展し、特に笠岡沖の島々には、海上交通において大きな働きをしたと推測される古代遺跡の数々があります。

なかでも片島遺跡は、笠岡湾に浮かぶ小島でしたが、昭和50年に農林省笠岡湾干拓事業により、現在は本土の一部となり、今後はこれら一帯の地域開発が予測されることから重要な遺跡となることと思われます。

島々には、サヌカイト等が広く散布していますが、当時の状況は、ほとんど知られておりません。

このたび、岡山県教育委員会の協力で、この地域の科学的研究踏査に着手できたことは、誠に意義深いものがあります。

ここに集録された貴重な資料を基に、これからも市民及び関係者みんなの努力で、片島遺跡が将来までも保存されることを切望いたします。

終りに、この研究の成果をまとめ出版するにあたり、ご協力くださいました方々に、深意の敬意と感謝を捧げる次第であります。

昭和60年3月

笠岡市教育委員会

委員長 藤井英樹

例　　言

1. 本書は岡山県教育委員会が笠岡市教育委員会の協力を得て実施した「片島詳細分布調査」の報告を、笠岡市教育委員会が刊行するものである。
2. 調査は浅倉秀昭と平井勝が担当し、1980年2月12日から15日まで実施した。
なお調査にあたっては笠岡市教育委員会の山口利勝係長をはじめ笠岡市文化財保護委員および地元住民の方々には多大な協力を得ました。記して感謝の意を表します。
3. 本報告書の執筆・編集は平井が担当し、遺物写真は井上弘の協力を得た。
なお報告書作成にあたっては網本善光（笠岡市教育委員会文化課）の協力を得た。
4. 本書第2図の遺跡分布図は国土地理院の25,000分の1の地図（寄島、福山東部）を複製したものである。
5. 本書第3図は「岡山県理蔵文化財報告」9から、第4図は「岡山県理蔵文化財報告」10から掲載した。

目 次

序	
例言	
I 調査の経緯	1
II 地理的・歴史的景観	2
III これまでの調査	4
IV 調査の概要	6
A 遺跡	6
B 遺物	13
Vまとめ	15

図 目 次

第1図 片島の位置	1
第2図 片島周辺の遺跡分布図	3
第3図 高丸散布地のトレンチ位置図（1978年）	4
第4図 高丸散布地のトレンチ位置図（1980年）	4
第5図 片島の遺跡分布図	5
第6図 地図索引番号図	6
第7図 汐ヶ鼻地区の遺跡	7
第8図 下浦地区の遺跡	8
第9図 下浦E遺跡	9
第10図 高丸地区の遺跡	10
第11図 上浦八幡神社遺跡	11
第12図 上浦A遺跡	12
第13図 土鍤と土器	13
第14図 石器	14

図版目次

- 図版 1 片島の全景
- 図版 2 1. 汐ヶ鼻地区遠景（南東から）
2. 汐ヶ鼻 1 号墳（南から）
- 図版 3 1. 汐ヶ鼻 2 号墳（西から）
2. 下浦 A 遺跡（西から）
- 図版 4 1. 下浦 B 遺跡・下浦 C 遺跡・下浦 D 遺跡（北東から）
2. 下浦 E 遺跡（南西から）
- 図版 5 1. 上浦八幡遺跡〈手前は高丸 B 遺跡〉（西から）
2. 高丸 A 遺跡（南から）
- 図版 6 1. 上浦 A 遺跡・上浦 B 遺跡（北から）
2. 高丸・上浦地区遠景（東から）
- 図版 7 石器
- 図版 8 1. 片島島内採集の石器
2. 汐ヶ鼻 1 号墳付近採集の金環

I 調査の経緯

岡山県の南西端、広島県と接する笠岡市は、平地の少ない陸地部と、瀬戸内海に浮かぶ島嶼群からなっている。島嶼群は、笠岡湾沖合に20以上もの島々が点在するもので、主なものには片島、神島、高島、白石島、北木島、真鍋島、大飛島、六島がある。片島はそれらの島々の中では比較的小さな島で、湾内の東端に位置しており、先土器時代の遺跡として知られていた。

ところが、1966年から着工された農林省による笠岡湾干拓事業によって、神島までの湾内は陸地化し、片島は広大な平地に位置する独立丘陵となった。それとともに干拓に関連する土取りも島の東端から始まり、さらに近年では遺跡と考えられていた区域での土取りも計画され、2回の確認調査を実施した。しかしいずれも遺構、遺物は認められなかった。それとともに今後予想される開発に対処するため詳細な分布調査をする必要性を感じた。そこで岡山県教育府文化課は笠岡市教育委員会社会教育課の協力を得て1980年に詳細な分布調査を実施した。

調査にあたっては笠岡市文化財保護委員、地元住民の方々をはじめ関係各位から多大な協力を得た。記して心から感謝の意を表します。

日誌

1980年2月12日 2班に分れ分布調査を行った。1班は島の西端、沙ヶ鼻地区と下浦地区を



第1図 片島の位置

担当した。北へ細長く延びる沙ヶ鼻の丘陵上にはサヌカイト片やナイフ形石器の散布が見られた。また古墳も2基が確認された。下浦地区においても丘陵上にはサヌカイト片の散布が見られ、先土器時代の遺跡が拡がっているものと推定された。

2班は高丸、上浦地区を担当した。丘陵上ではサヌカイト片の散布が見られたが、全体に少量である。

13日 沙ヶ鼻地区と下浦地区で一部試掘を行った。

14日 下浦八幡神社周辺の試掘を行った。

15日 上浦八幡神社周辺の試掘を行った。

II 地理的・歴史的景観

片島は現在では拡大な干拓地の一角に横たわる独立丘陵を呈しているが、かつては笠岡湾に浮かぶ小島であった。東西に細長く、全周約4.5kmを測る。海岸部から丘陵へは急峻な斜面となり、畑や果樹園が拡がっている。

島の中央やや西寄りには標高86mを測る比較的急峻な山があり、その西側が下浦、東側は高丸と上浦の地区に分けられる。島の西端に位置する下浦地区は、中央部の南北に湾が深く入り込み、西端は南北に細長く丘陵が延びている。その西側には砂浜が拡がる。

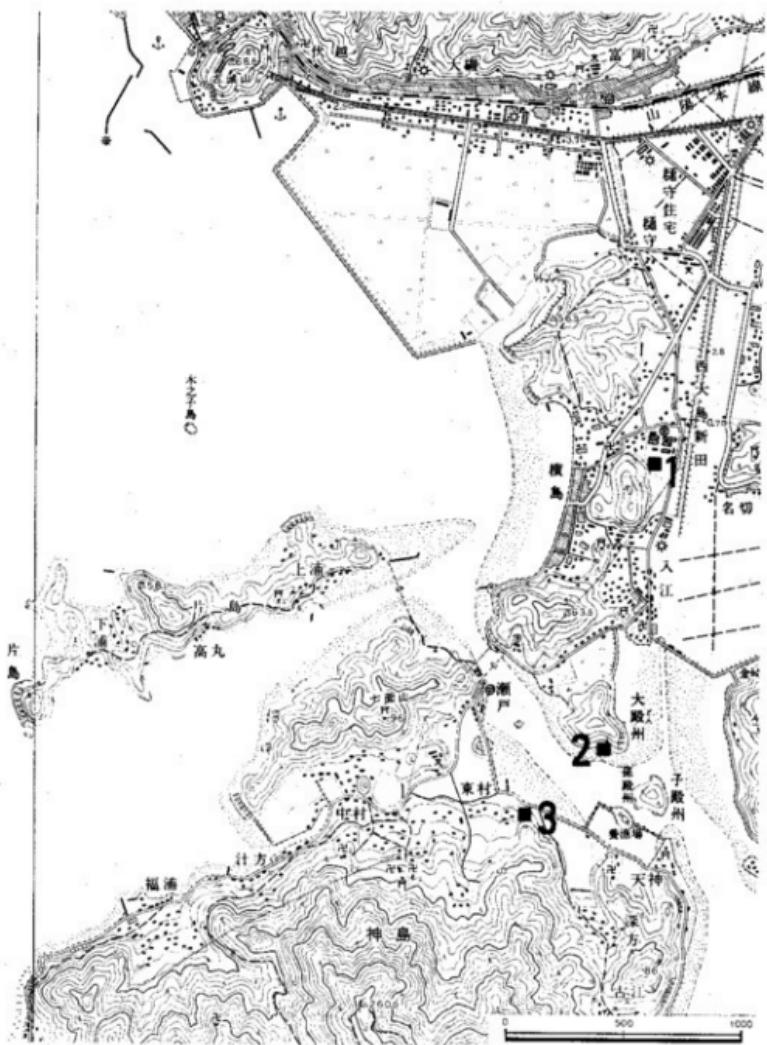
島のほぼ中央に位置する高丸地区は、標高約40mの丘陵が東西に細長く延びており、南側の一部では土取りが行われている。高丸地区の東側、島の東端にあたる上浦地区は、八幡神社の所在する標高約45mの丘陵と、そこから派生し、北と東に延びた丘陵とからなっている。このうち、東端に突き出した丘陵は土取りが進行している。島の東端からは東に向かって砂州が発達していた。

片島は1967年に来島した鎌木義昌氏による分布調査によって、ほぼ全島が先土器時代の遺跡として知られるところとなった。氷河期である先土器時代には瀬戸内海は陸地化しており、当然片島も草原にそびえる丘陵の一つであったと考えられる。笠岡の沖合の海底で発見されるシカやナウマンゾウの骨が、かならずしも片島の先土器時代の遺物と同時期のものであるという確証はないが、陸地化した瀬戸内海に棲息していた動物群の一端を窺わせる。

氷河期が終り、気候が温暖化する縄文時代になると海面が上昇し、瀬戸内海には除々に海水が流入し、縄文時代前期の初め頃には現在の瀬戸内海よりやや大きい海が形成された。笠岡湾でも縁辺の現沖積地の奥深くまで海となっていたことが、縄文時代貝塚の分布から知られている。たとえば湾の東部に位置する前期の原貝塚は現海岸から1.5km奥まった所に、そして湾奥に位置する後期の有田貝塚や助実貝塚は現海岸から約4kmも奥まった所に位置している。

片島周辺の縄文時代遺跡としては笠岡工業高校グランド遺跡、大殿洲遺跡、神島東村貝塚がある。笠岡工業高校グランド遺跡は土取り工事によって発見されたもので、貝塚が存在したと考えられている。遺物は中期から後期の土器、石器や石斧そして土製品などが出土した。大殿洲遺跡は砂浜に立地する。表採ではあるが、前期から後期の土器が認められる。神島東村貝塚の詳細は不明であるが、後期の貝塚と考えられている。

弥生時代及び古墳時代の遺跡としては、笠岡工業高校グランド遺跡で若干の弥生土器片が、大殿洲遺跡では弥生土器、土師器、須恵器などが出土している。



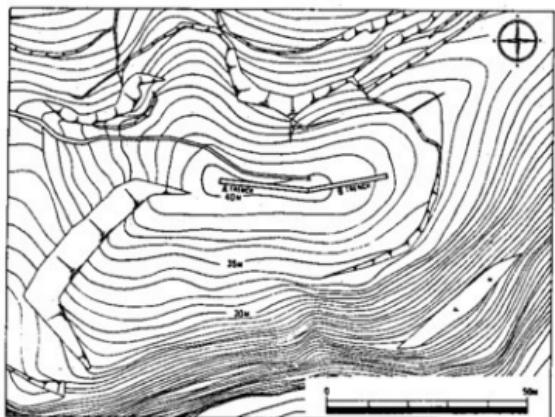
第2図 片島周辺の遺跡分布図

1. 笠岡工業高校グランド遺跡 2. 大殿洲遺跡 3. 神島東村貝塚

III これまでの調査

片島における発掘調査は、これまで2回実施されている。最初の調査は1978年12月1・2日に行われた。場所は島のほぼ中央にあたる高丸地区で、干拓事業に関連する土取り計画に伴う確認調査である。

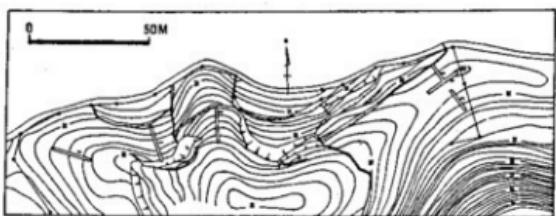
土取り計画区域は標高約40mの丘陵で、平坦な頂部は畠地、そして斜面部は果樹園や畠となっている。調査前の観察で僅かなサヌカイト片や中世の土器片を採取していたことから、頂部に2本のトレンチを設定した。トレンチの基本層序は表土(20m前後)直下が風化花崗岩の地山となり、遺物包含層は認められなかった。また地山面での遺構も検出されず、表土からサヌカイトのチップ1片が出土したのみである。



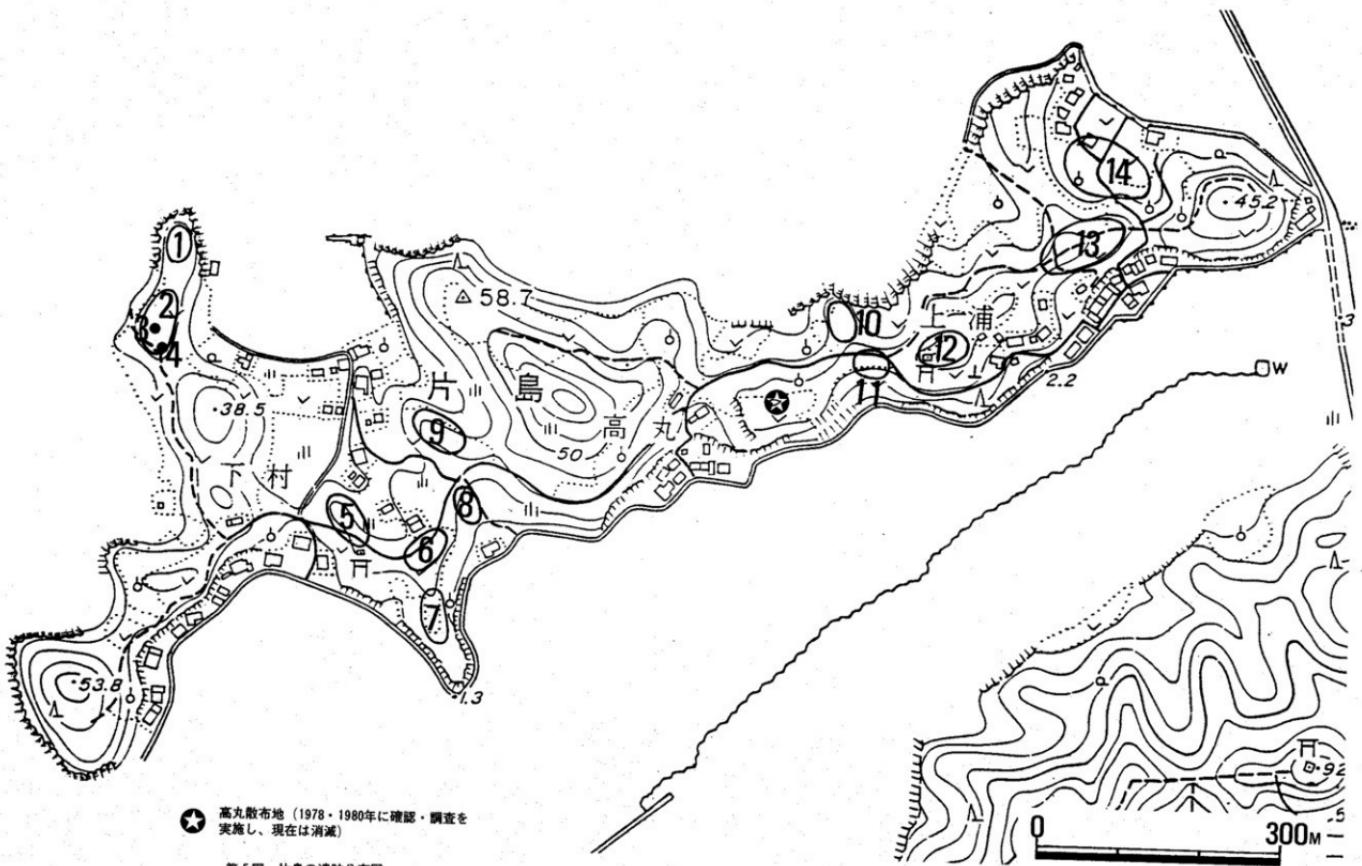
第3図 高丸散布地のトレンチ位置図（1978年）

つづいて1980年1月16～19日にも確認調査を行った。場所は前回調査した丘陵の北斜面部及び東に延びる丘陵である。トレンチは東に延びる標高30～32mの丘陵頂部に3本、斜面部にも3本を設定した。

前者は調査前にブドウ畠であったことから擾乱が深くまで及び、包含層や遺構は確認されていない。後者は一部畠地化したときの盛土なども見られるが、基本的には表土直下は風化花崗岩の地山となり、遺物及び遺構は存在しなかった。



第4図 高丸散布地のトレンチ位置図（1980年）



● 高丸散布地（1978・1980年に確認・調査を実施し、現在は消滅）

第5図 片島の遺跡分布図

IV 調査の概要

A 遺跡

1. 汐ヶ鼻A遺跡 (第5図1)

汐ヶ鼻地区は島の西北端にあたる。遺跡は北に向って舌状に延びる標高約25mの丘陵頂部に立地する。現状は果樹園となっており、若干のサヌカイト片とナイフ形石器を採取した。中央部を1カ所試掘して土層を観察したが、25cm前後の耕作土の直下は風化花崗岩の地山となっている。

2. 汐ヶ鼻B遺跡 (第5図2)

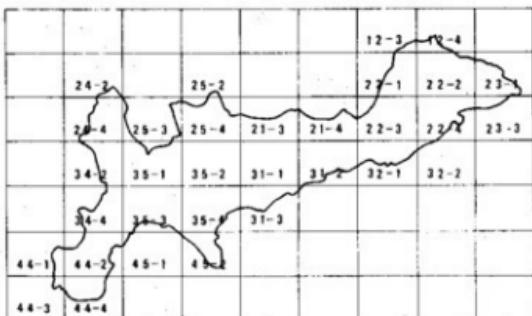
汐ヶ鼻A遺跡の位置する丘陵先端の高まりから、南へ少し行くと広い平担部が見られる。大部分は荒地であるが、緩かな南斜面は畠地となっている。その畠地にはサヌカイト片が多く散布しており、平担な頂部全体が遺跡と考えられた。確認のため頂部の荒地を試掘したところ、20cm前後の表土下は風化花崗岩の地山となり、遺物の包含層は認められなかった。

3. 汐ヶ鼻1号墳 (第5図3)

汐ヶ鼻B遺跡の西斜面畠地内に所在する。すでに墳丘は流失し、横穴式石室が完全に露呈している。石室は西に開口しており、全長7.5m、幅1.3mを測る。

4. 汐ヶ鼻2号墳 (第5図4)

1号墳の南約20mの小道に接して所在する。墳丘は失なわれており、横穴式石室の側壁の一部が現存している。石室は南に開口しており、全長7m、幅1mを測る。



第6図 地図索引番号図

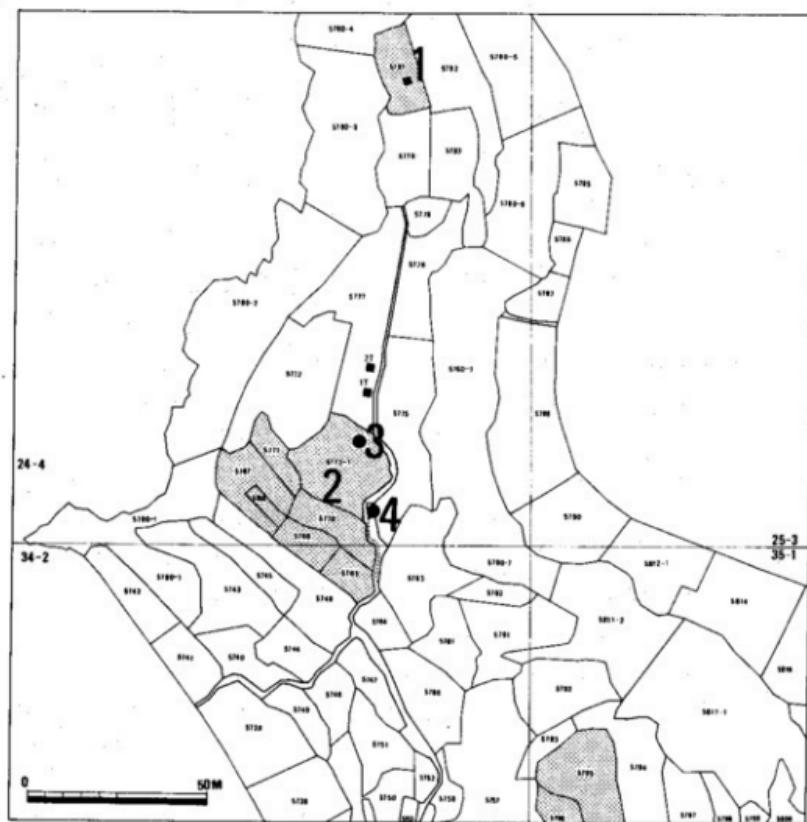
5. 下浦A遺跡

(第5図5)

下浦八幡神社の北西丘陵頂部に所在する。すべて畠地となっており、サヌカイト片が採取される。

6. 下浦B遺跡

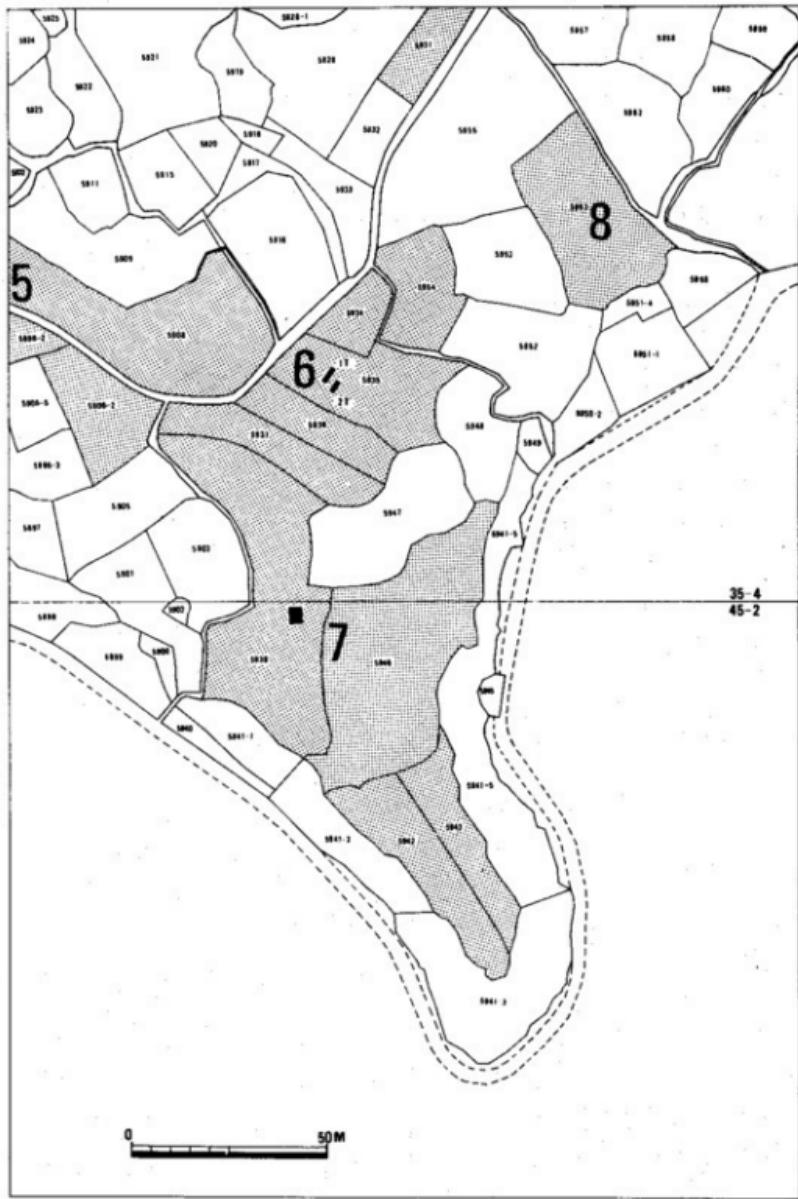
(第5図6)



第7図 汐ヶ鼻地区の遺跡

島の中央からやや西寄りに島内で一番高い山（標高 86m）があり、ここから南西に長い尾根が派生し、先端は海に突出している。遺跡は派生した尾根の頂部に所在する。現状はすべて畠地となっており、サスカイト片が多く散布していた。そこで遺跡の保存状態を観察するため2箇所試掘を行った。

基本的な層序はⅠ層として表土が10cm前後あり、その下にⅡ層の暗黄褐色土が10cm前後見られ、さらにその下に赤味を帯びた黄褐色を呈し、Ⅲ層より粘性をもつⅣ層が見られた。遺物はⅠ層からサスカイト片が、Ⅱ層からはサスカイト片と黒曜石片が出土し、Ⅲ層では認められな



第8図 下浦地区の遺跡

かった。ただこのことをもって本来の包含層はⅢ層でⅣ層は無遺物層であるということは、小範囲であり速断はできない。

7. 下浦C痕跡 (第5図7)

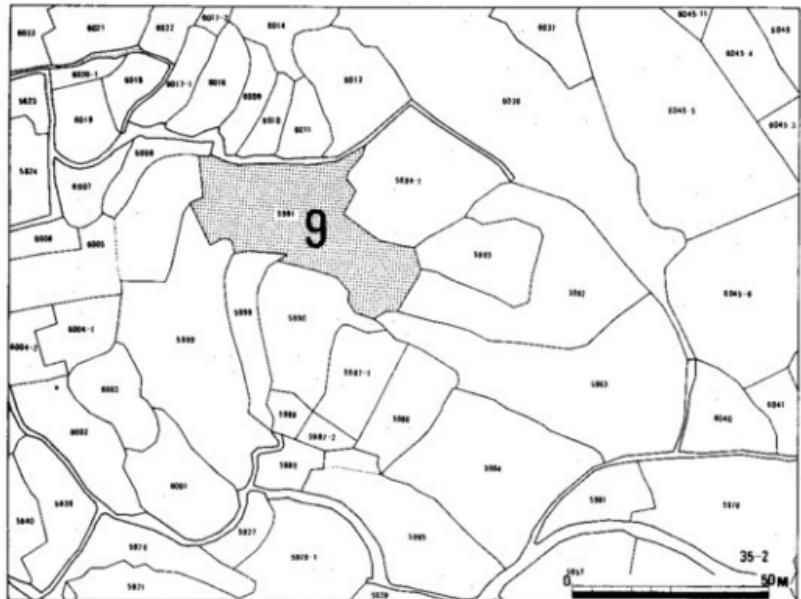
下浦B遺跡の所在する丘陵が海に突出するその先端部に所在する。北から南に向かって緩かに傾斜する尾根上で、現状は畠地と果樹園になっている。若干のサヌカイト片が採取されたため1個所試掘を行なった。基本的な層位は下浦B遺跡と同じであるが、遺物は全く出土しなかつた。

8. 下浦D遺跡 (第5図8)

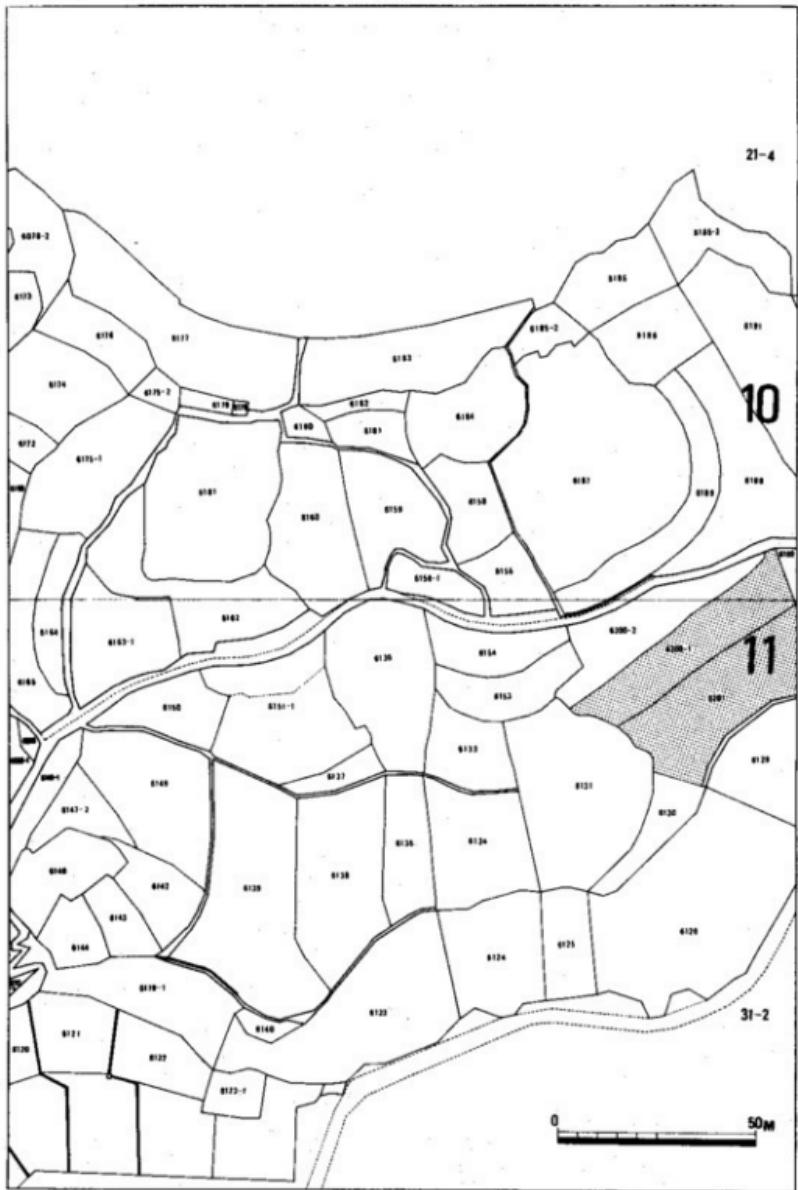
下浦B遺跡の所在する丘陵の東側斜面部で、谷となっているところである。現状は畠地になっており、そこからサヌカイト片以外に尖頭器やナイフ形石器も採取された。地形が谷部にあるため本来ここに遺跡が所在したとは考え難く、下浦B遺跡から流れたものとした方がよいかも知れない。

9. 下浦E遺跡 (第5図9)

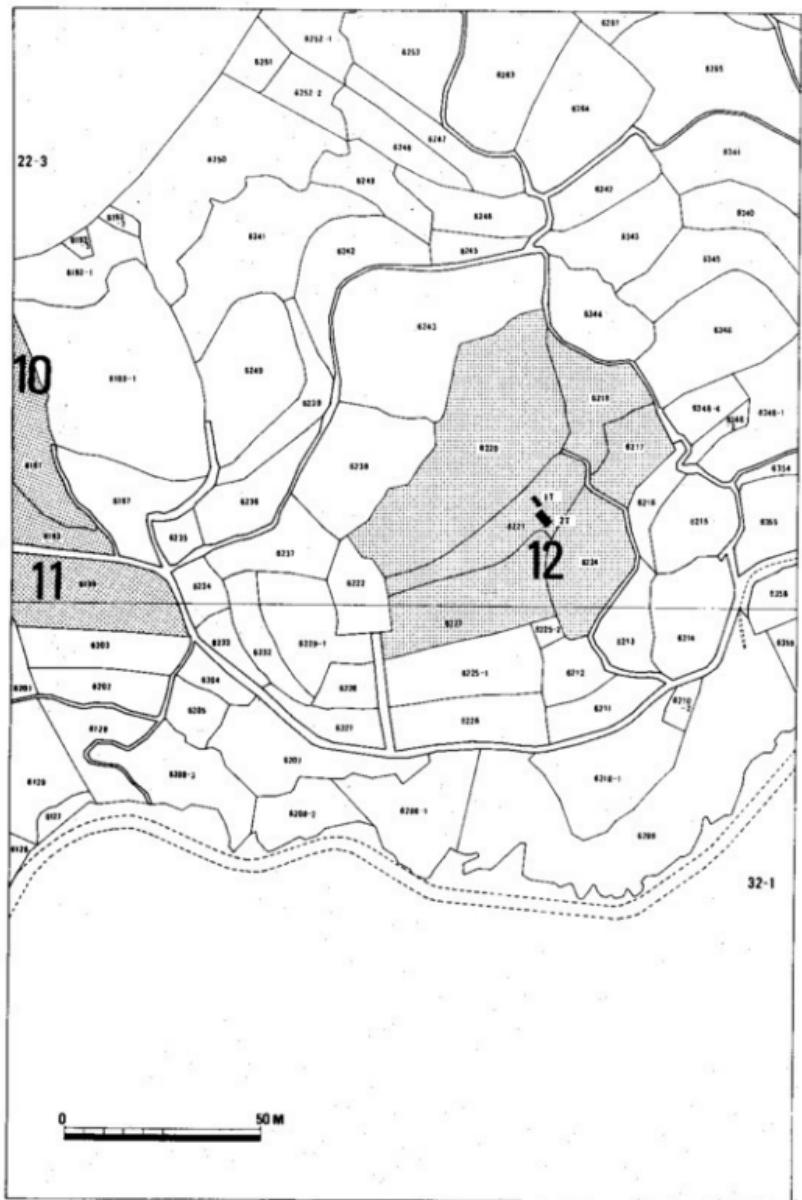
島の中央部やや西寄りに所在する一番高い山から、西北に派生した短かい尾根の頂部に遺跡



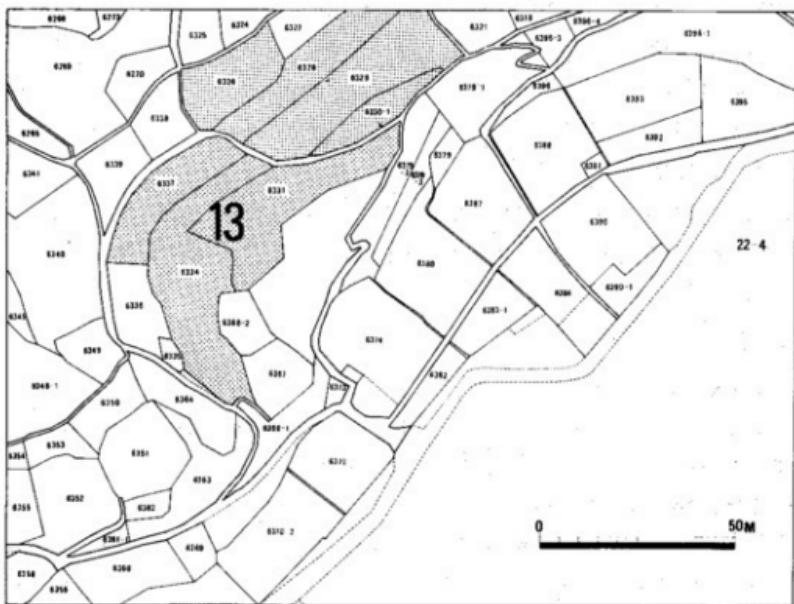
第9図 下浦E遺跡



第10図 高丸地区的遺跡



第11図 上浦八幡神社遺跡



第12図 上浦A遺跡

は位置する。現状は畠地となっており、サヌカイト片や石鎚が採取された。

10. 高丸A遺跡 (第5図10)

島の中央部やや東寄りの丘陵頂部から北斜面については、すでに確認調査を実施したところである。その丘陵は東に向かって一担低くなり、ふたたび東に向って高くなるが、ここから北に短かい尾根が派生し、遺跡はその頂部に所在する。現状は畠地となっており、サヌカイト片や石鎚が採取された。

11. 高丸B遺跡 (第5図11)

高丸A遺跡の南側尾根上に所在する。現状は畠地で、サヌカイト片や中世の土器片を採取した。

12. 上浦八幡遺跡 (第5図12)

八幡神社の所在する丘陵の頂部に立地する。現状は畠地となっており、サヌカイト片と中世土器片が採取された。そこで遺跡の保存状態を観察するため2個所試掘を行なった。基本層位はⅠ層表土(約25cm)、Ⅱ層暗黄褐色土(約20cm)、Ⅲ層黄褐色土(約10cm)、Ⅳ層赤味の強い黄褐色土(約7cm)、Ⅴ層黄褐色土(約20cm)となり、その下は風化花崗岩の地山であった。

遺物はⅢ層からサヌカイト片及び中世土器片。Ⅳ層からはサヌカイト片が出土した。

13. 上浦A遺跡 (第5図13)

上浦八幡遺跡の所在する丘陵から東に延びる丘陵頂部に立地する。現状は畠地で、サヌカイト片及び中世土器片が採取された。

14. 上浦B遺跡 (第5図14)

上浦A遺跡の所在する丘陵の北側低地に立地する。埋め立て前は小さな入江に面していたと考えられる。現状は畠地で、中世土器片が採取された。

B 遺 物

汐ヶ鼻遺跡 (第14図1)

1978年に高丸地区の確認調査を実施した際に採集されたサヌカイト製のナイフ形石器である。剣片の一側縁にプランディングを施すもので、風化が著しい。

下浦D遺跡 (第14図2~4)

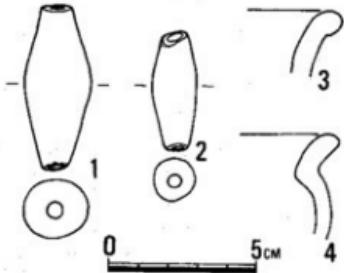
2はサヌカイト製のナイフ形石器で、2側縁にプランディングが施されている。3は台形状のサヌカイト製ナイフ形石器で、基部の一側縁にプランディングが施される。4はサヌカイト製の尖頭器である。

高丸B遺跡 (第13図1~3)

1・2は土錘である。3は土師質で、内面に一部刷毛目を残すが、横ナデにより調整されている。胎土には砂粒を含み、淡褐色を呈する。

上浦八幡遺跡 (第14図5)

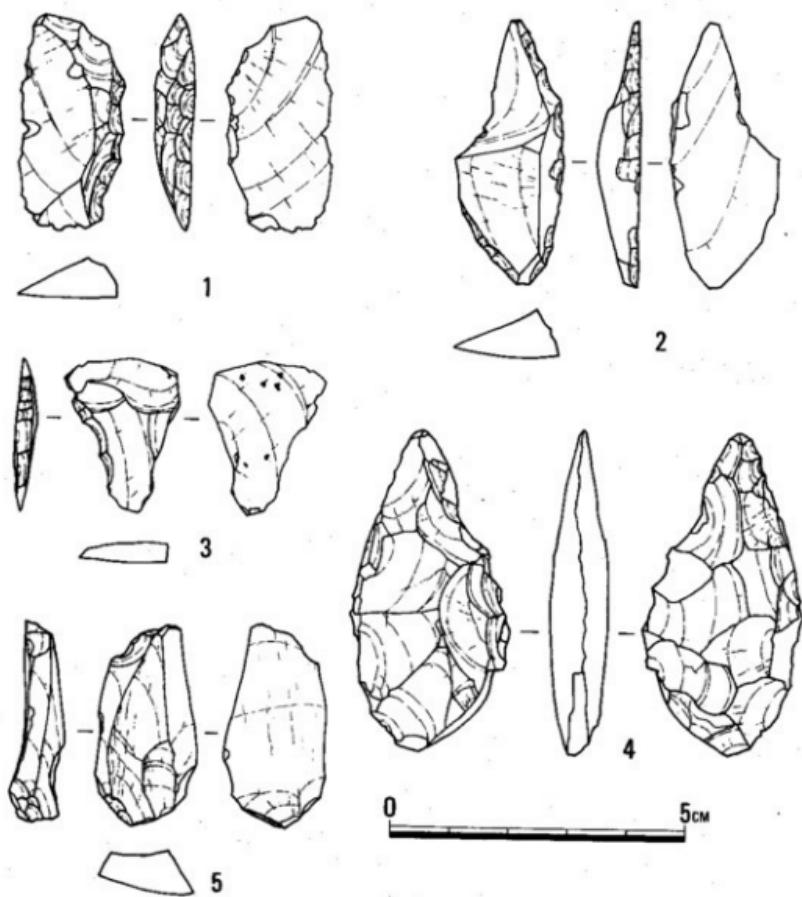
サヌカイト製のナイフ形石器である。概長剣片を用い、先端部の一側縁にプランディングを施している。



上浦B遺跡 (第13図4)

器形は不明で内外面とも横ナデにより調製されている。胎土は砂粒を含み淡黄白褐色を呈する。

第13図 土錘と土器



第14図 石器

V ま と め

今回の詳細な分布調査によって、14の遺跡が確認された。その多くはサヌカイト片のみが採取される遺跡である。したがってその所属する時期についてはかならずしも明確でない。サヌカイトの風化具合から先土器時代に属するものが多いと思われるが、下浦E遺跡や高丸A遺跡では縄文時代のものと考えられる石器も見られる。ただ汐ヶ鼻A遺跡ではナイフ形石器、下浦D遺跡ではナイフ形石器と尖頭器、上浦八幡遺跡ではナイフ形石器が出土していることから、大部分は先土器時代の遺跡であることは確実である。とりわけ上浦八幡遺跡は遺物包含層が厚く、保存状態は良好である。

汐ヶ鼻に古墳が2基所在することから、その生産基盤として土器製塩が考えられた。汐ヶ鼻の東側には現在漁港となっている入江が、また西側には片島海水浴場であった砂浜があり、これらはその候補地の一つであろうが、干拓事業によって埋められており、確認し得ていない。

中世の遺跡については明確でないが、中世と考えられる土器の細片が採集されている。

参考文献

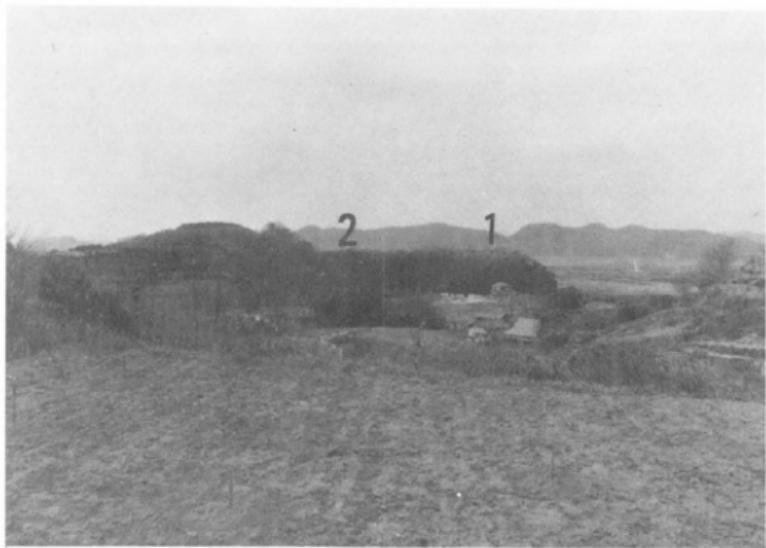
- 間壁茂子「笠岡市笠岡工業高校グランド遺跡」『倉敷考古館研究集報』第1号 1966年
間壁忠彦・間壁茂子・藤田憲司「笠岡市大殿洲の縄文時代遺跡」『倉敷考古館研究集報』第12号 1976年
『笠岡市史』第一巻 1982年
平井勝「笠岡市片島高丸散布地確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』9 1979年
松本和男「笠岡市片島散布地の確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』10 1980年

(註)

図版8左端の石器は、松浦竜司氏が採集されたもので、掲載を快諾いただき、深く感謝の意を表する次第です。なお、掲載の遺物は、いずれも笠岡市立郷土館に収蔵しています。



1. 片島の全景（1977年撮影）



1. 汐ヶ鼻地区遠景（南東から）

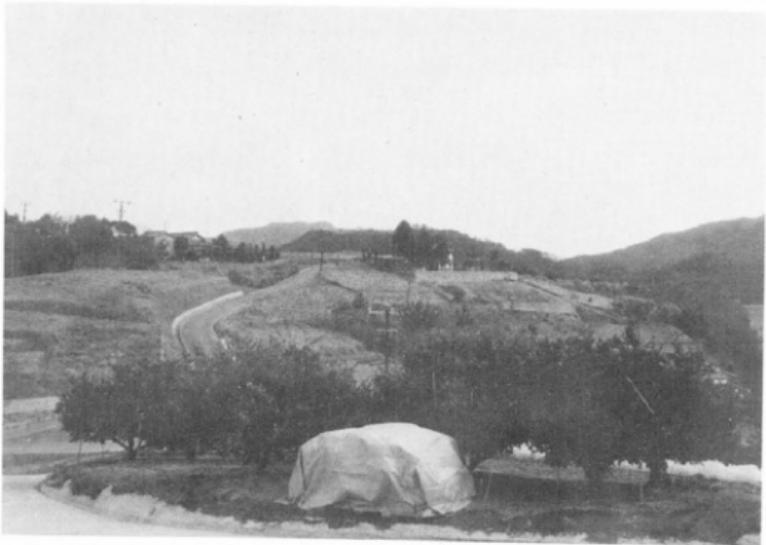


2. 汐ヶ鼻 1号墳（南から）

図版 3



1. 汐ヶ鼻2号墳（西から）



2. 下浦A遺跡（西から）



1. 下浦B 遺跡・下浦C 遺跡・下浦D 遺跡（北東から）



2. 下浦E 遺跡（南西から）

図版 5

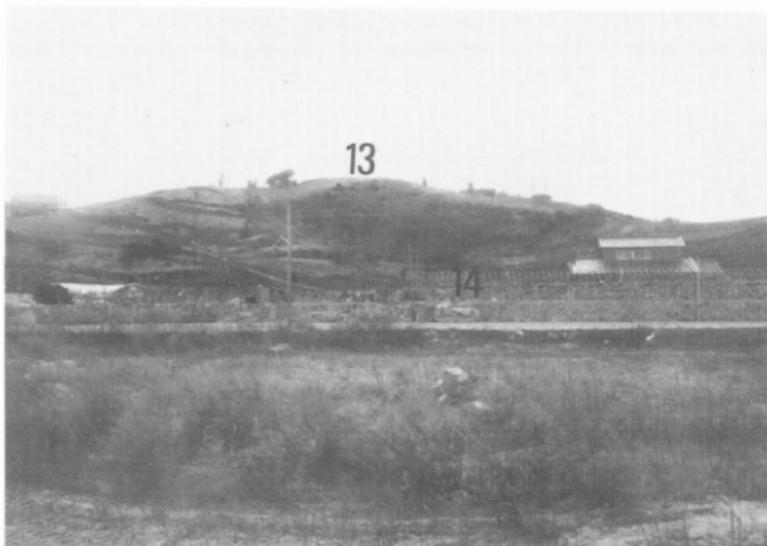


1. 上浦八幡遺跡（手前は高丸B 遺跡）（西から）



2. 高丸A 遺跡（南から）

13

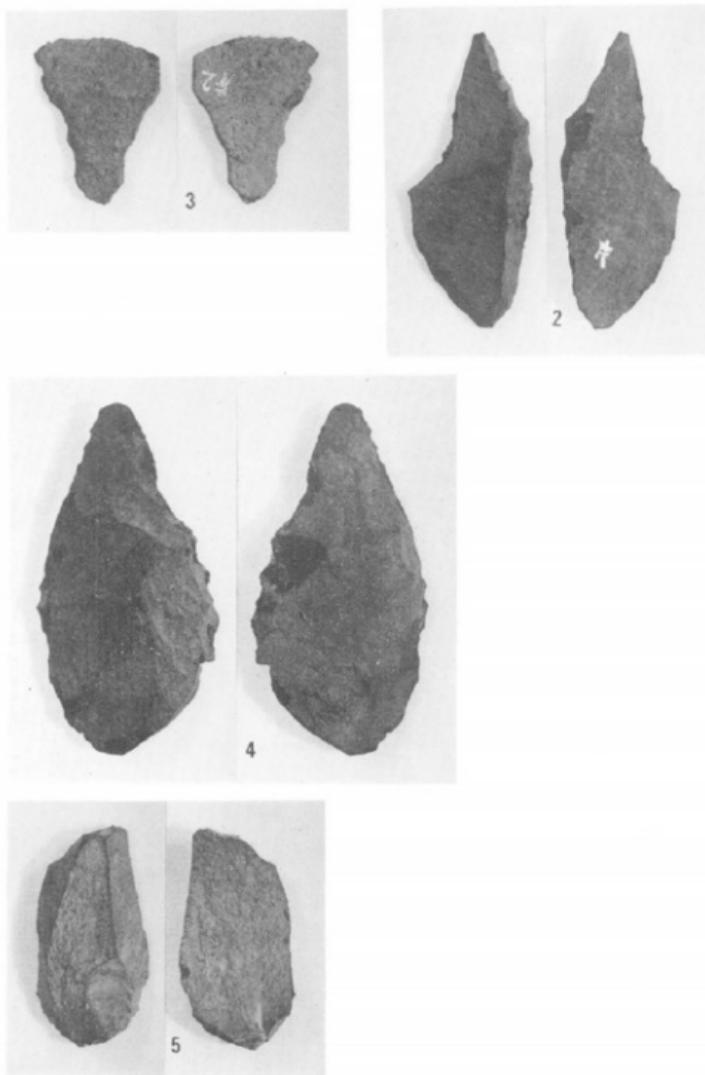


1. 上浦A 遺跡・上浦B 遺跡（北から）



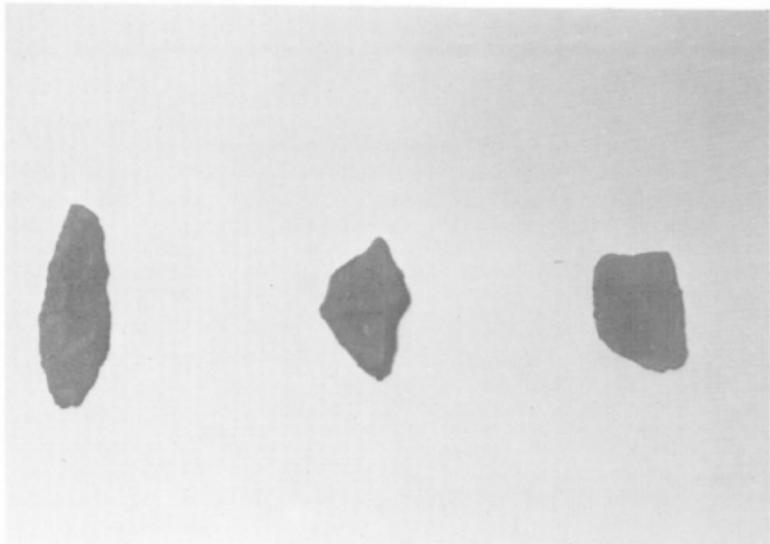
2. 高丸・上浦地区遠景（東から）

圖版 7

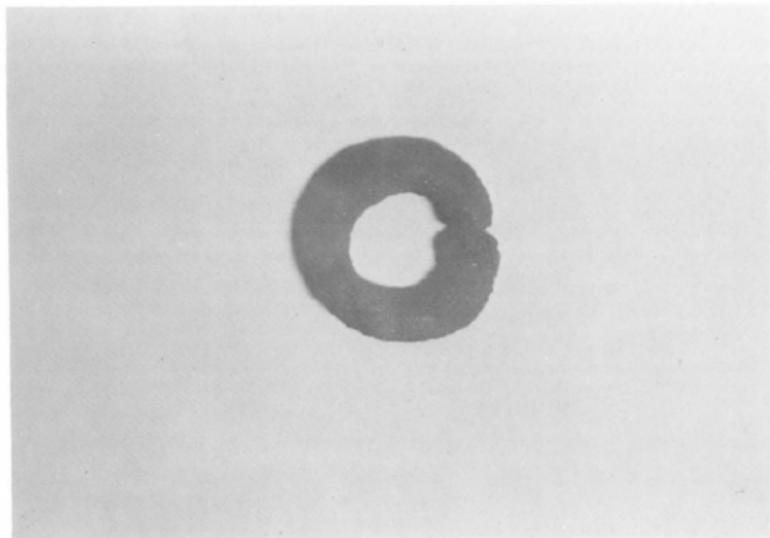


石 器

図版 8



1. 片島島内採集の石器（左端は松浦竜司氏採集）



2. 汐ヶ鼻 1 号墳付近採集の金環

片島分布調査報告書

昭和60年3月25日印刷

昭和60年3月30日発行

編集 岡山県教育委員会

発行 笠岡市教育委員会

